

あらくさ句会・令和元年十一月例会 選評

【日時】令和元年十一月三十日（土）

午後三時から

【場所】居酒屋「もりや」

【出席者】眸子、三省、耕田、英堂、りな、曲枝、素乱、伸行、

陸奥海（九名）

【投句者】眸子、温智、鳴尾、所山、三省、万里、りな、泰山、

軽博、開九、凡生、至茶、浪知、白塵、耕田、英堂、

一笑、曲枝、素乱、伸行、端石、陸奥海、丁夫

（二十三名）

【兼題】「帰り花」または傍題も可

【投句】四句投句 【選句】七句選

《あらくさ選評》 稲田眸子

人の世に妄念多し帰り花

丁夫

やがて臨終が近づいたと感じた枕頭のものが、目を閉じ、横になつている仙厓和尚に顔をくつつけんばかりに身を乗り出して最後の言葉を聞こうと懸命に耳に手を当てていた。「お言葉を！」。

ゆつくりと仙厓和尚は口を開き、「死にとうない」と漏らした。「な、何とおおせられました！」弟子坊は愕然としている。大禪師の最期にあるまじき未練執着の妄言と感じ、師のために思う狼狽も見える。「ほんまに、死にとうないのう」と呟きながら、仙厓は眠るよう

に首を折った。
作家の堀和久は、著書「死にとうない 仙厓和尚伝」でこう書いている。仙厓和尚の心は、小春日和に誘われて咲いた帰り花の心境であつたに違いない。

手術終へ妻眺めぬし返り花

三省

案じていた奥様の手術も成功し、待ちに待った退院。自宅できつろぎながら、二人で庭を眺めている情景であろうか。

小春日和の日溜まりの中、ふと見つけた返り花に目をとめた奥様。ご主人である作者は、その姿を垣間見ながら、（だいぶよくなつたね。よかつた、よかつた…）と心の中で呟いたのであろう。奥様を見守る作者の情愛が伝わってくる一句。

我は我あまたの中で帰り花

耕田

童謡詩人の巨星と称されながら若くして世を去った詩人・金子みすゞ。『私と小鳥と鈴と』の中に「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがつて、みんないい」というフレーズがある。人間を温かに見つめるみすゞの眼差しは、小春日和のあたたかさ、ほころび咲く返り花の情に通じているような気がする。

多くの人々に支えられて生かされている自分に気づく時、「みんなちがつて、みんないい」と呟き、「帰り花」として咲くことのできる幸せに感謝する。そのような心情を詠んだ一句に違いない。

狂ひ咲きなんて言うなよ花夫々

陸奥海

「帰り花」は「狂ひ花」とも言われ、異常気象のために、冬に咲くはずもない桜や桃や梨の花が咲くことを指す。作者は「気がふれる」という言葉の響きに抵抗感を持ち、「狂ひ咲きなんて言うなよ」と宥めているのである。

下五の「花夫々」の措辞も効果的。花にそれぞれの咲き方があるように、私たちの人生もまたそれぞれあるんだよ、そう吐露しているような気がする。

ラガーマンミリメートルに命懸け 素乱

ラグビーW杯一次リーグA組の日本対スコットランドを観戦した俳優の館ひろしは、「稲垣選手がトライをした時は涙が出るほど素晴らしいと思った。プロップというポジションであの位置までフオーローしていたことがすごい。ラガーマンとし、またチームのレベルの高さを感じました」と熱っぽく語っていた。まさに「命懸け」であり、トライへの執念は「ミリメートル」なのである。

故郷の空にはいつも柿ありし 曲枝

我が家には大きな柿の木があり、鈴なりに実をつけていた。その柿の実をお八つ代わりに食べていたものである。「柿」は郷愁を誘う果物の一つなのである。

作者のふるさととの原風景は、大きな柿の木と大空、そして、秋の日射しなのである。ふるさと恋の一句。

補聴器が集める枯葉の軋む音 英堂

聴力が低下した人や難聴の人の「聞こえ」を補うために開発された補聴器。それは、入って来た音を大きくして伝える機能を持った器械。さらに、単に入って来た音を大きくするということだけではなく、入って来た音を加工して聞きやすくするという機能も併せ持っている。

技術が進歩し、今では枯葉が風に擦れ合う音、枯葉が踏まれて軋む音まで集めることができるのか。掲句を味わいながら、技術の進歩は私たちを幸せにしてくれるのであろうか、あるいは、聞きたくない音まで拾ってしまうのか。それはある意味困りものだな：などと思っているのかも知れない。

◇この一句◇ 佐藤白塵

布団干す限界近き重さかな 所山

寒さが日に日に深まってゆく。昨日の朝の寒さで目覚めた反省から昨晩は分厚い冬用掛蒲団を出してきた。今朝はよく晴れたので、庭の物干し竿まで蒲団を持ち出した。重い蒲団をよっこらしよと持ち上げる。この蒲団の重さを目の高さの竿まで持ち上げるには己のうで力は限界か。やっとの思いで掛けた蒲団であるが、さて普段は軽い洗濯物を干すだけのこの竹竿が重さに耐えられるか。二重の限界を目の当たりにしつつも、今日の陽の暖かさに目を細めて浸っているのである。

◇あの一句◇ 白石凡生

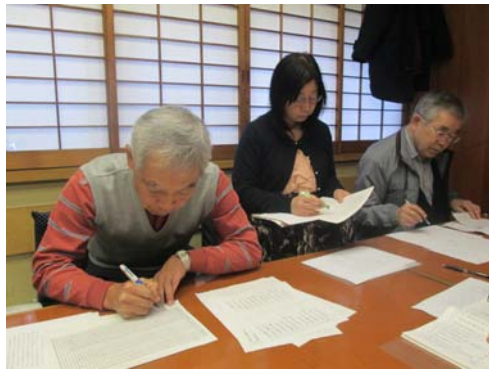
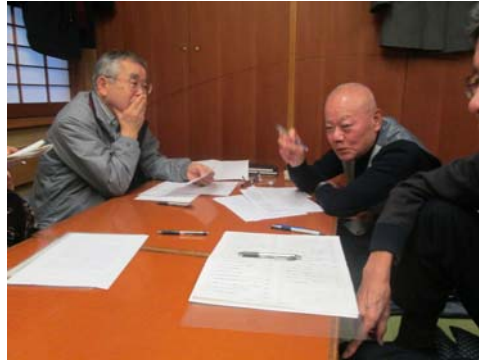
補聴器が集めし枯葉の軋み音 英堂

視ることから、聴くことへ。枯葉の軋み音とは、枯葉同士がカサカサと風に吹き寄せられて触れ合う音か？ 自然の摂理のような音。補聴器を通じてそれを聴き取っている作者。そのような、澄まされた感覚の世界が湧いてきました。

◇さらにもう一句◇ 住田至茶

常連の猫めぬ出窓冬に入る 三省

窓辺に佇む猫を眺めているのは楽しいものである。窓から猫は空模様を確かめ、通行人を観察し、鳥を見つけると獲物を狙う目を見せる。犬や猫を見かければそわそわと落ち着きをなくし、時には感情をあらわにする。そんな時、人に飼いならされて



も失わず持ち続ける猫の野生を垣間見る思いがする。
出窓の常連となっていた猫が居なくなつた。猫に何か不幸が起こつたのかもしれない。冬に入ったには出窓の外に広がる景色だけでなく、飼い主である作者の気持ちもなのである。

